倉垣遺跡発掘調査概要

農村基盤整備事業「歌垣第２地区」に伴う調査・Ⅲ

－ 豊能郡能勢町倉垣所在 －

1998・5

大阪府教育委員会

はしがき

倉垣遺跡の所在する豊能郡能勢町は大阪府の北端に位置し、町境の北側を京都府、南側を兵庫県とに接しています。摂津・丹波の山々に取り囲まれ、大阪府内でも数少ない自然が多く残されている高原の町です。しかし、豊かな自然に恵まれたこの地域も近年の圃場整備事業、ゴルフ場、宅地などの開発により、その景観は大きく変貌しようとしています。

大阪府教育委員会では「歌垣第２地区」で進められている圃場整備事業に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を平成６年度より実施してきました。今回報告する９年度の調査では、倉垣遺跡において圃場の切り土や用排水路工事という地下の遺構に影響を及ぼす部分の発掘を行ないました。その結果、古墳時代のかまど付きの竪穴式住居群や中世の掘立柱建物などが発見され、当時の能勢地域を知る上で貴重な歴史資料を得ることができました。この成果は地域史の解明に重要なものであることと確信しております。

調査に際しては多くの方々のご協力をいただいたことに厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財行政に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成10年５月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　鹿野一美

例　　言

１、本書は大阪府教育委員会が大阪府農林水産部より依頼を受けて、文化財保護課が担当実施した府営農村基盤整備事業「歌垣第２地区」に伴う発掘調査の概要報告書である。

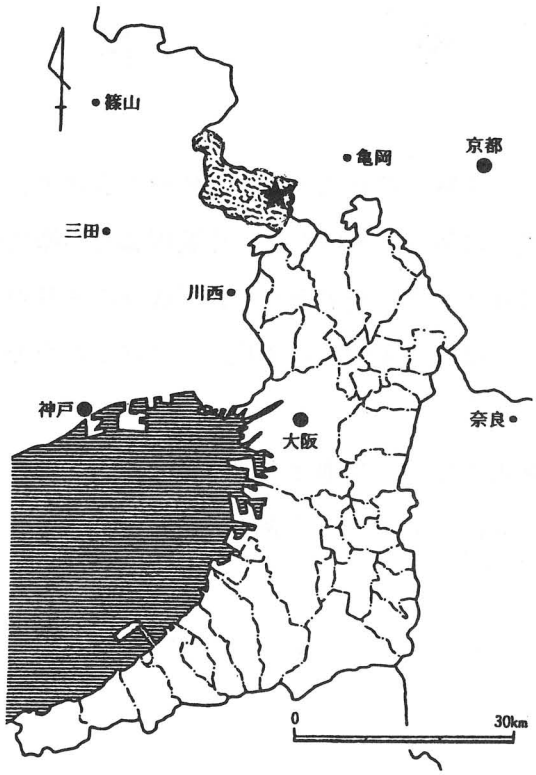
２、調査は文化財保護課技師辻本武を担当者として、平成９年８月から現地調査を実施し、それに伴う整理作業を並行して進め、平成10年３月に一旦終了した後、同年４月より本書作成作業を行なった。

３、調査にあたっては、地権者各位および地元土地改良区、能勢町教育委員会、大阪府北部農と緑の総合事務所池田分室をはじめ多くの諸機関、諸氏より懇切なご協力を賜わった。記して感謝する次第である。

４、本書の執筆・編集は辻本が行なった。

目　　次

第１章　位置と環境…… 1
第２章　調査の成果
　第１節　調査区の設定…… 3
　第２節　Ａ区の調査…… 3
　第３節　Ｂ区の調査…… 13
　第４節　Ｃ・Ｄ区の調査…… 17
第３章　まとめ…… 18
報告書抄録…… 19



第１図　能勢町と調査地点

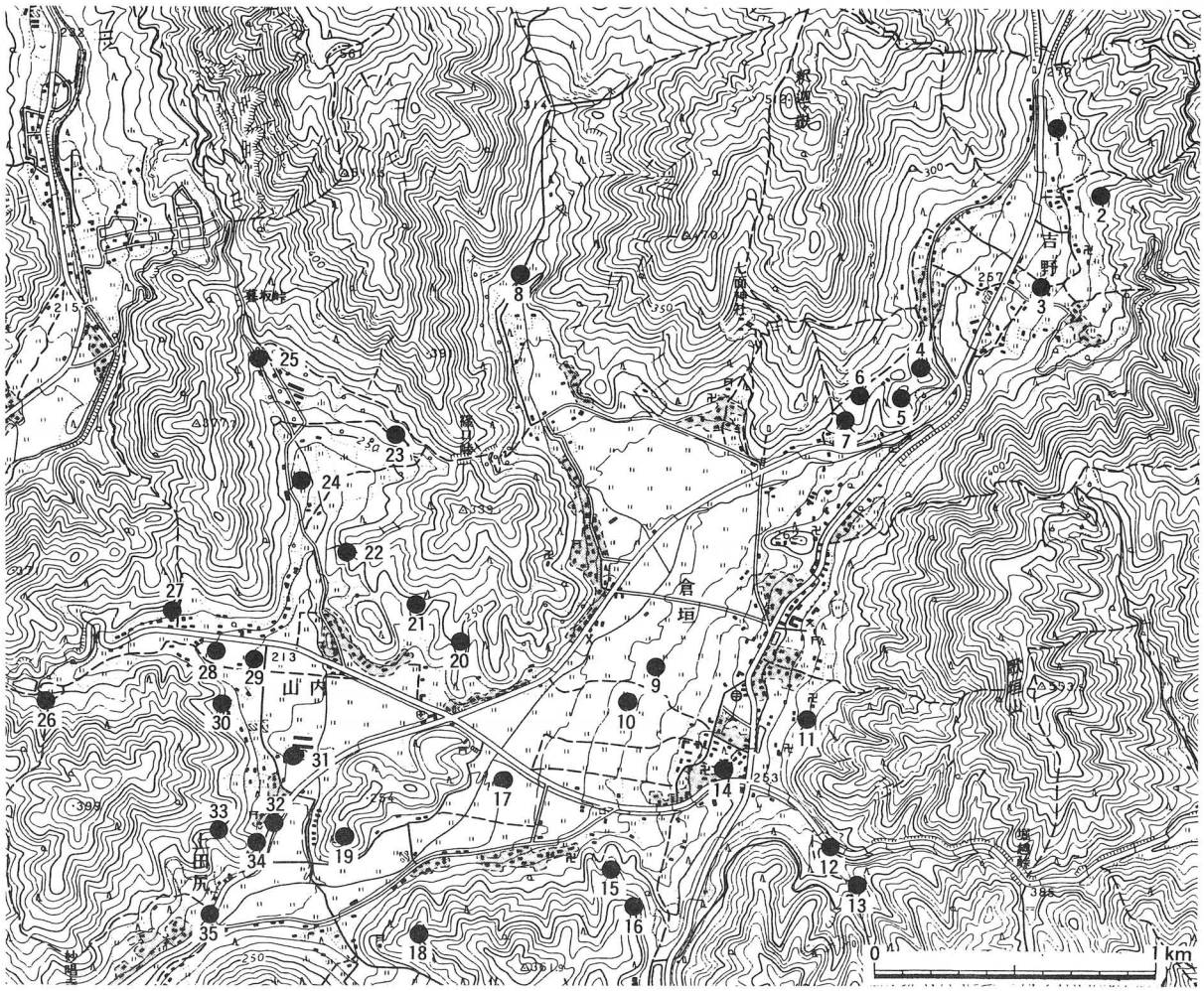
第１章　位置と環境

倉垣遺跡の所在する倉垣地区は、能勢町内の東部に位置し、標高350～550ｍの山々に取り囲まれた、東西１㎞、南北1.5㎞の広さの小盆地である。盆地平野の標高は210～250ｍを測る。盆地の西側を田尻川が南流し、周囲から小河川や水路がこの川に向かって合流する。この川は野間川・大路次川等とともに猪名川となって大阪湾にそそぐ。

現在の集落は盆地内の周縁の、山塊との接点に所在し、盆地中央には集落が形成されていない。なお倉垣地区は、北の吉野地区と西の山内地区と合わせて、1956年の能勢町成立までは「歌垣村」という行政単位であった。

倉垣地区およびその周辺には数多くの遺跡が知られている。

縄文時代の遺跡としては、堀越遺跡（12）、地黄北山遺跡（13）があり、早期・後期・晩期の土器の出土が報告されている。



1．吉野関遺跡　2．吉野城跡　3．吉野遺跡　4．吉野古墳群　5．浜湯場古墳群　6．原田遺跡　7．岡崎古墳群　8．小戸古墳群
9．倉垣遺跡　10．ハイ原遺跡　11．柿谷古墳　12．堀越遺跡　13．地黄北山遺跡　14．若宮古墳群　15．藤巻古墳群　16．能勢坂古墳
17．横町遺跡　18．岩尾丸古墳　19．円山古墳群　20．大貝谷古墳群　21．弥五郎谷古墳群　22．東山古墳　23．篠口暮坂古墳群　24．戸石遺跡
25．暮坂遺跡　26．畑垣内遺跡　27．山内池尻遺跡　28．阪尻遺跡　29．坪ノ内遺跡　30．唐竹遺跡　31．三宅遺跡　32．稲荷社遺跡
33．田尻古墳　34．西原古墳　35．二ノ院遺跡

第２図　周辺の遺跡

弥生時代では、中・後期の地黄北山遺跡（13）や横町遺跡（17)、同期の方形台状墓群が見つかった原田遺跡（６)、中期の円形竪穴住居跡を検出したハイ原遺跡（10)、後期の土器の出土が報告されている稲荷社遺跡（32）がある。

古墳時代になると、布留式土器の伴う住居跡等を検出した唐竹遺跡（30)、初頭から後期までの存続した稲荷社遺跡（32)、しがらみ遺構が見つかった阪尻遺跡（28）以外はすべて古墳である。前期古墳は今のところ発見されておらず、皆無と言ってよい。中期古墳では大貝谷古墳群（20）の一つに埴輪の伴うものがある。ただし埴輪の小片以外の遺物がないので、中期古墳と断定するには躊躇する。後期古墳では遺物の出土があって時期の分かるものとしては岡崎古墳群（７)、小戸古墳群（８）Ａ支群、円山古墳群（19）Ａ支群、大貝谷古墳群（20)、弥五郎谷古墳群（21)、篠口暮坂古墳群（23)、畑垣内遺跡（26）が挙げられる。７世紀に入る終末期の古墳では小戸古墳群（８）Ｂ支群、円山古墳群（19）Ｂ支群がある。

８世紀の奈良時代の顕著な遺跡は知られていない。９世紀以降の平安時代の遺跡としては吉野遺跡（３)、ハイ原遺跡（10)、唐竹遺跡（30）がある。

中世では13世紀の集落跡の吉野関遺跡（１)、14世紀の集落跡の吉野遺跡（３)、ハイ原遺跡（10)、山内池尻遺跡（27)、阪尻遺跡（28）がある。

以上、中世までの遺跡を簡単に略述したが、その詳しい内容については、下記の刊行物を参考にされたい。

大阪府教育委員会

『円山古墳群発掘調査概要』（1990）

『吉野遺跡発掘調査概要』（1993）

『吉野遺跡発掘調査概要』（1994）

『吉野遺跡発掘調査概要III』（1995）

『吉野関遺跡発掘調査概要』（1996）

『山内池尻・畑垣内遺跡発掘調査概要』（1996）

『歌垣第２地区発掘調査概要II—ハイ原・唐竹・坪ノ内・阪尻遺跡』（1997）

能勢町教育委員会

『地黄北山遺跡・横町遺跡発掘調査概要』（1980）

『能勢町史第４巻』（1981）

『原田遺跡発掘調査報告書』（1998）

第２章　調査の成果

第１節　調査区の設定

昨年度はハイ原遺跡という狭い面積の周知の遺跡部分の発掘調査とともに、周辺の試掘を実施して遺跡の広がりを調査した。その結果、かなり広い範囲に遺跡が存在することが判明した。小字名から遺跡の名称を付けるという従来の方法によっては、この広い範囲の新たな遺跡名は困難であるので、地区名である「倉垣」をもって遺跡名とした。従って従来のハイ原遺跡は倉垣遺跡の内に含まれることになる。

今年度の当遺跡の調査は、Ａ区からＥ区までの５調査区を設定した。このうちＡ～Ｄ区の４調査区は「歌垣第２地区」という事業名であり、Ｅ区は「歌垣地区」というそれである。調査の原因となる事業が違うので、Ｅ区については本書では報告せずに、別途報告することになる。

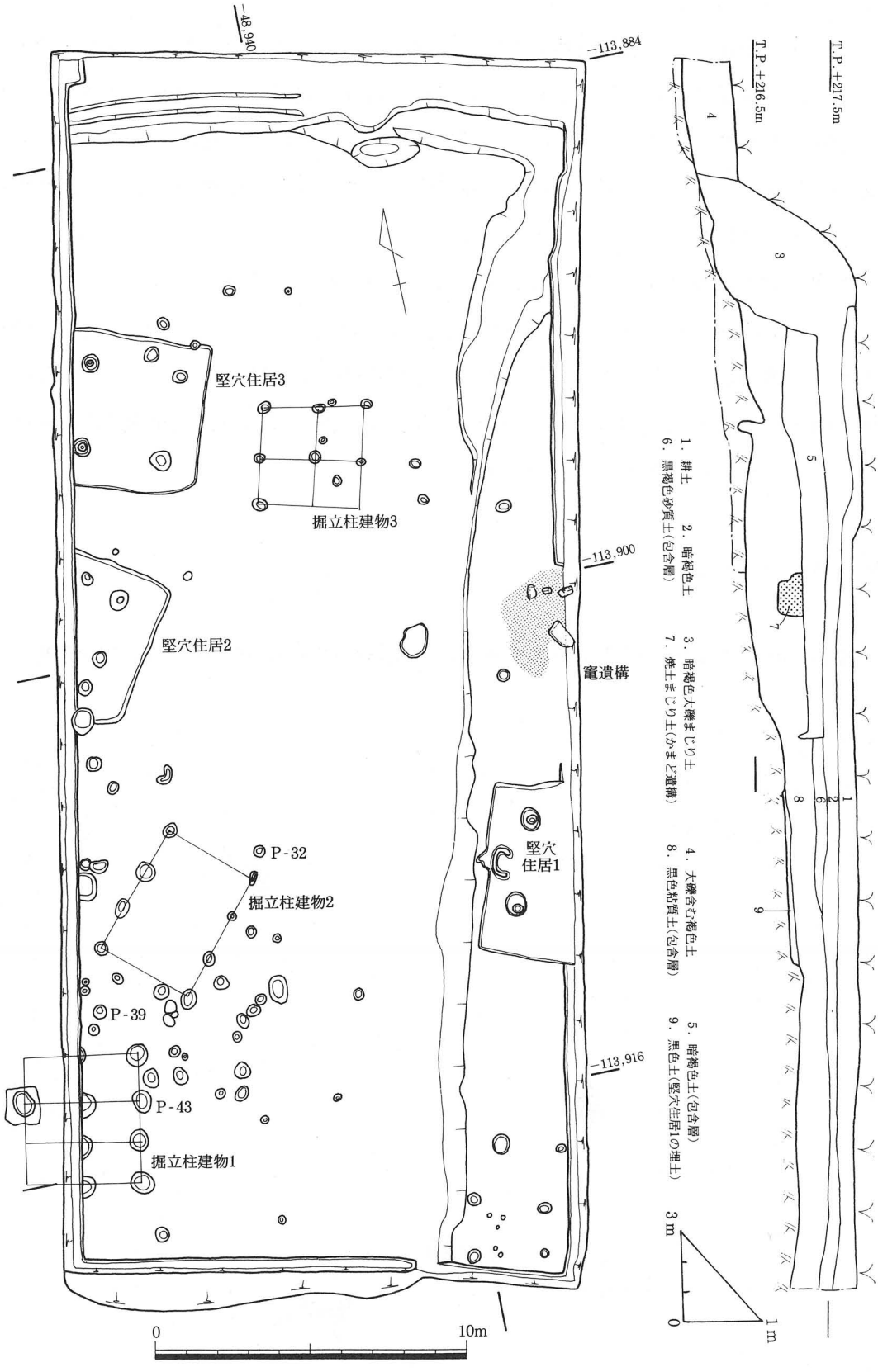
調査区は西からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区と名付けたが、実際の調査は圃場整備工事のスケジュールの関係で、Ｂ→Ｃ・Ｄ→Ａ区という順に実施した。

第２節　Ａ区の調査

調査区

当区は東西15m、南北39m程の調査区であるが、東端の幅４ｍの範囲は一段高い畑地で、他は

第３図　調査区位置図


-48,940
-113,884
-113,900
-113,916
竪穴住居3
掘立柱建物3
竪穴住居2
竈遺構
竪穴
住居1
P-32
掘立柱建物2
P-39
P-43
掘立柱建物1
0
10m
T.P.+216.5m
T.P.+217.5m
1. 耕土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色大礫まじり土
4. 大礫含む褐色土
5. 暗褐色土(包含層)
6. 黒褐色砂質土(包含層)
7. 焼土まじり土(かまど遺構)
8. 黒色粘質土(包含層)
9. 黒色土(竪穴住居1の埋土)
3m
0
1m

第4図　A区遺構全体図

低いレベルの土地となっている。便宜上前者を上段、後者を下段と呼ぶ。

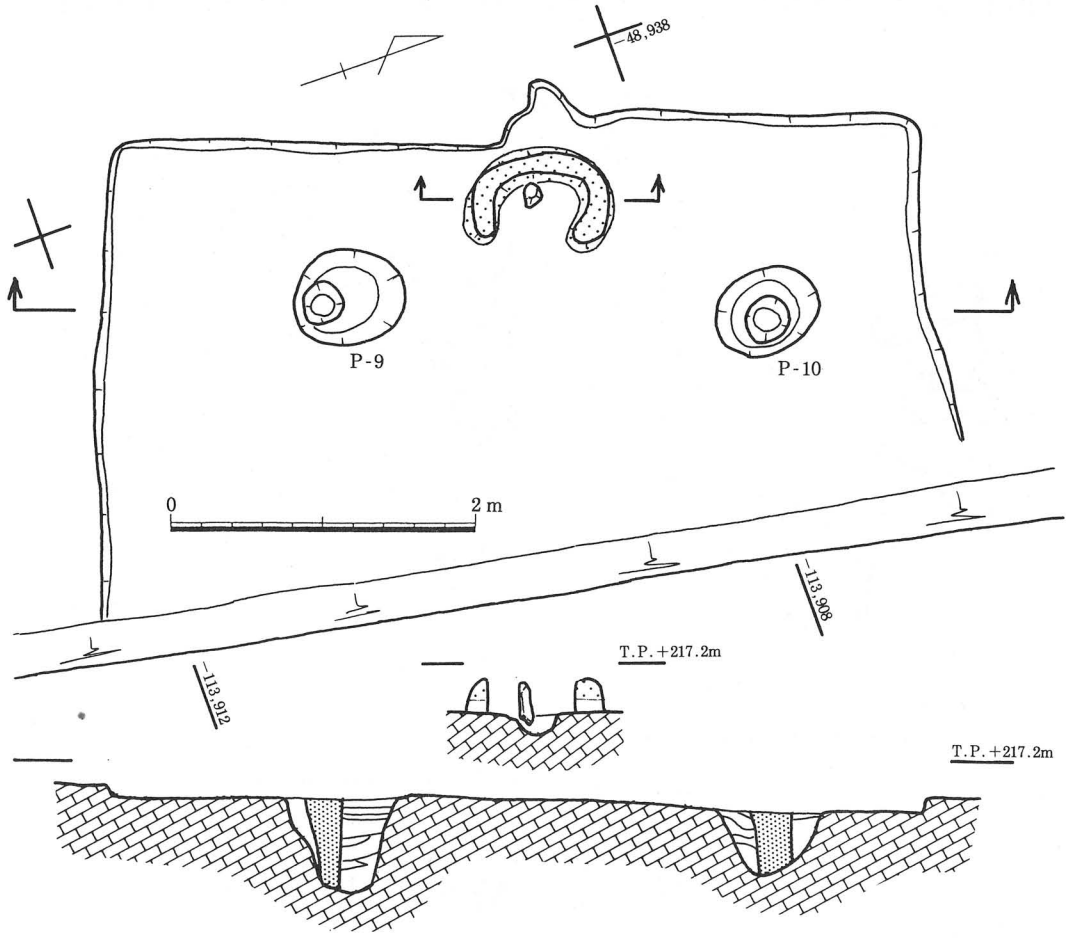
上段では７世紀の遺物包含層が0.4～0.8mの厚さで堆積しているのに比し、下段では包含層がなく、その北半部に現代の畑に伴う盛土層が広がるのみで、南半部はいわゆる表土下即地山である。遺構検出面である地山では、上段と下段とでは0.4m程の段差となっている。

竪穴住居１

調査区の東端中央のやや南で検出した。その東半部は調査区外となって不明であるが、他の類例からして一辺5.3mの正方形のものとなろう。

西辺中央に作り付け竈を検出した。これは焼土塊の広がりを縦横に小トレンチを入れることにより、黄色い粘土がベルト状に繋がり、全体が馬蹄形を呈することが判明したため、竈を復元することができた。竈は東西１m、南北0.6mの馬蹄形。竈壁は幅0.25m、高さ0.2mを測るが、上半部が黄色粘土、下半部が黒色土である。これは床面の一部に黒色土を盛った上に、黄色粘土で竈を構築した可能性を考えることができる。竈内には幅８㎝、長さ30㎝の支脚の石が立ったまま検出された。

検出した柱穴は２つであるが、未調査部分があるので全体では４つとなるだろう。柱穴の堀方は、径0.7m、深さ0.4～0.6mとかなり大きなもので、断面に径0.25mの柱根部分が明瞭に観察



第５図　竪穴住居１実測図

された。

住居には壁溝はない。また検出した竈の上面のレベルが住居の検出面より0.1m高いので、竈が突き出たような状態となったが、セクションを見る限り掘り誤りということはない。

住居内の埋土から土師器甕（1）、竈内から土師器碗（2～6）と須恵器甕（7）が出土している。時期は7世紀前半と考えられる。

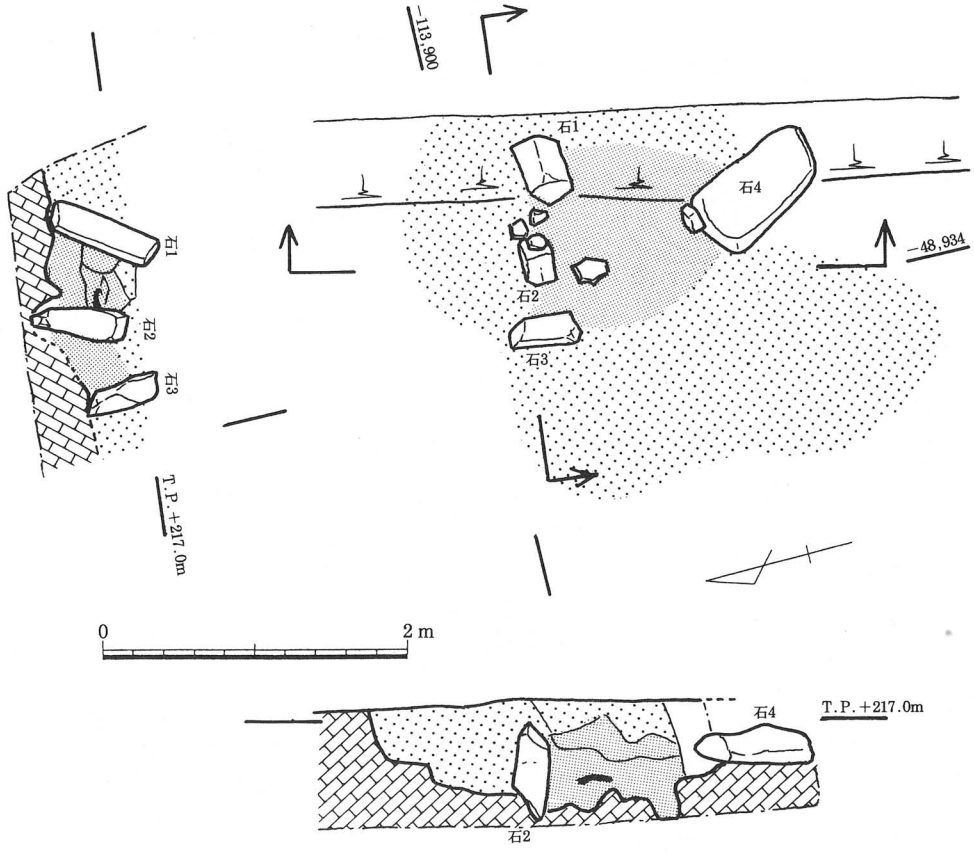
竈状遺構1

竪穴住居1の北5m離れて所在する。包含層中に検出した遺構で、地山面で検出した竪穴住居1とは層位的に時期の違うものとなる。

長さ0.5～0.6mの細長い石3本（石1～3）を0.4m間隔に立て、ここから0.9m離れて長さ0.8m、幅0.4mのやや平らな石（石4）を立てている。ただし石4は倒れた状態で検出した。これら4個の石の間には厚さ0.4mの焼土が上下2層になって堆積していた。上層が黄色、下層が赤色である。前者は竈の天井部の崩落であろう。また竈の周囲1.8m四方に焼土混じり土が広がる。

3本の並んだ石1～3のうち、真中の石2は他よりその頭のレベルが低いので、支脚であろう。また他の石1・3と石4は、竈の壁体の一部であろうと考えられる。

焚き口は判然としなかったが、能勢地方における竪穴住居に伴う竈の例では、南東を焚き口とするものが多いので、これもそのように考えたい。そうすると石4が焚き口の袖石であったこと



第6図　竈状遺構実測図（細かい網目は焼土、荒い網目は焼土混じり土）

になる。

この竈は竪穴住居に伴うものと当初考えて精査を繰り返したが、セクション含めてその痕跡は見い出しえなかった。竈から南西に２ｍ、北西に2.5m離れて小ピットが一つずつあったが、これらが竈に伴う柱穴と考えるならば、掘立柱建物内に構築された竈となろう。そうでないとしたら、屋外の竈となろう。

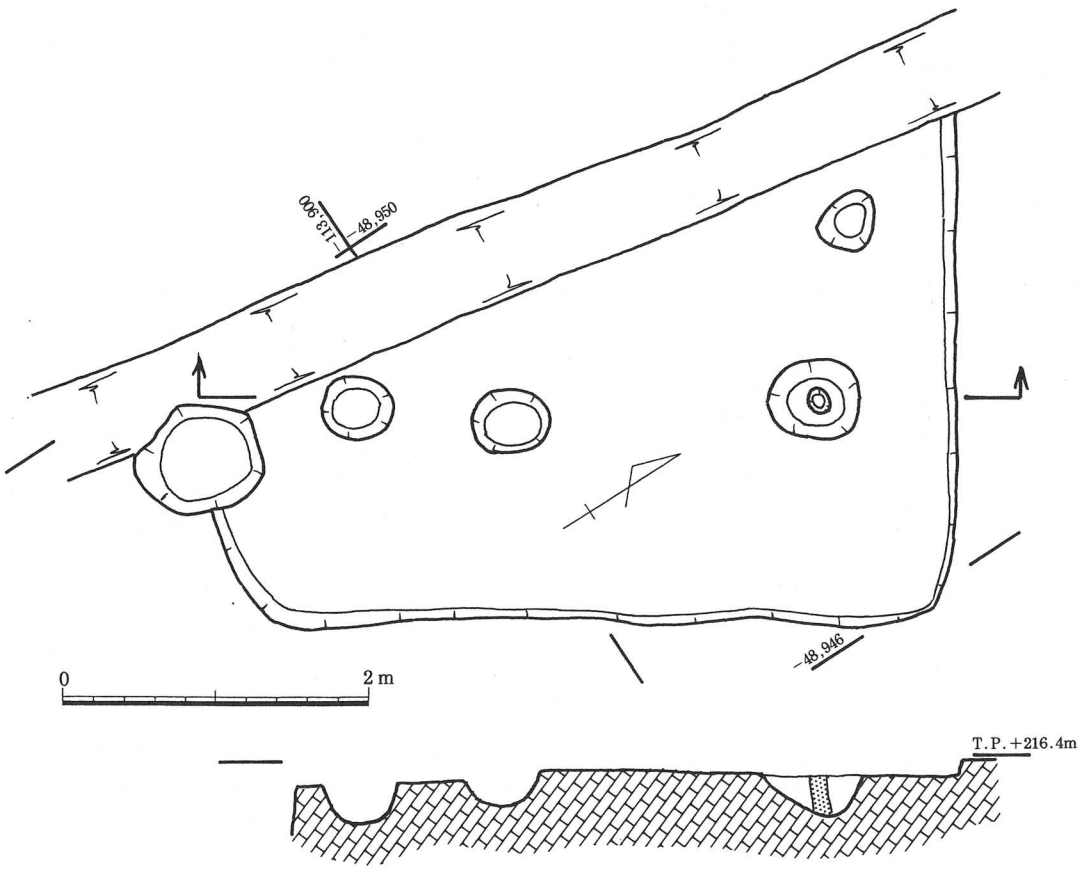
竈内からは土師器甕（８）、いわゆる回転台土師器（９）、須恵器の坏蓋（10）と身（11）が出土している。竈周辺の焼土混じり土からは（12～21）が出土した。（12）の須恵器坏の天井部にはヘラ記号が描かれる。（17）は焼成の悪い須恵器高坏と考えた。土師器碗（19～21）は手持ちヘラ削りで、（21）の内面には放射状暗文が施される。竈内と周辺とに遺物を分けてみたが、同一時期と考えてよいだろう。７世紀前半。

竪穴住居２

調査区の中央西端で検出した。一辺4.9mの方形のもので、柱穴は２つ検出したが、未調査部分があるので、全体で４つであろう。

柱穴の掘り方は径0.5m前後、深さ0.3m程度で、その一つの断面には径0.1mの柱根の痕跡が観察された。

この住居跡からは土師器の細片が出土したが、図化し得るものはない。

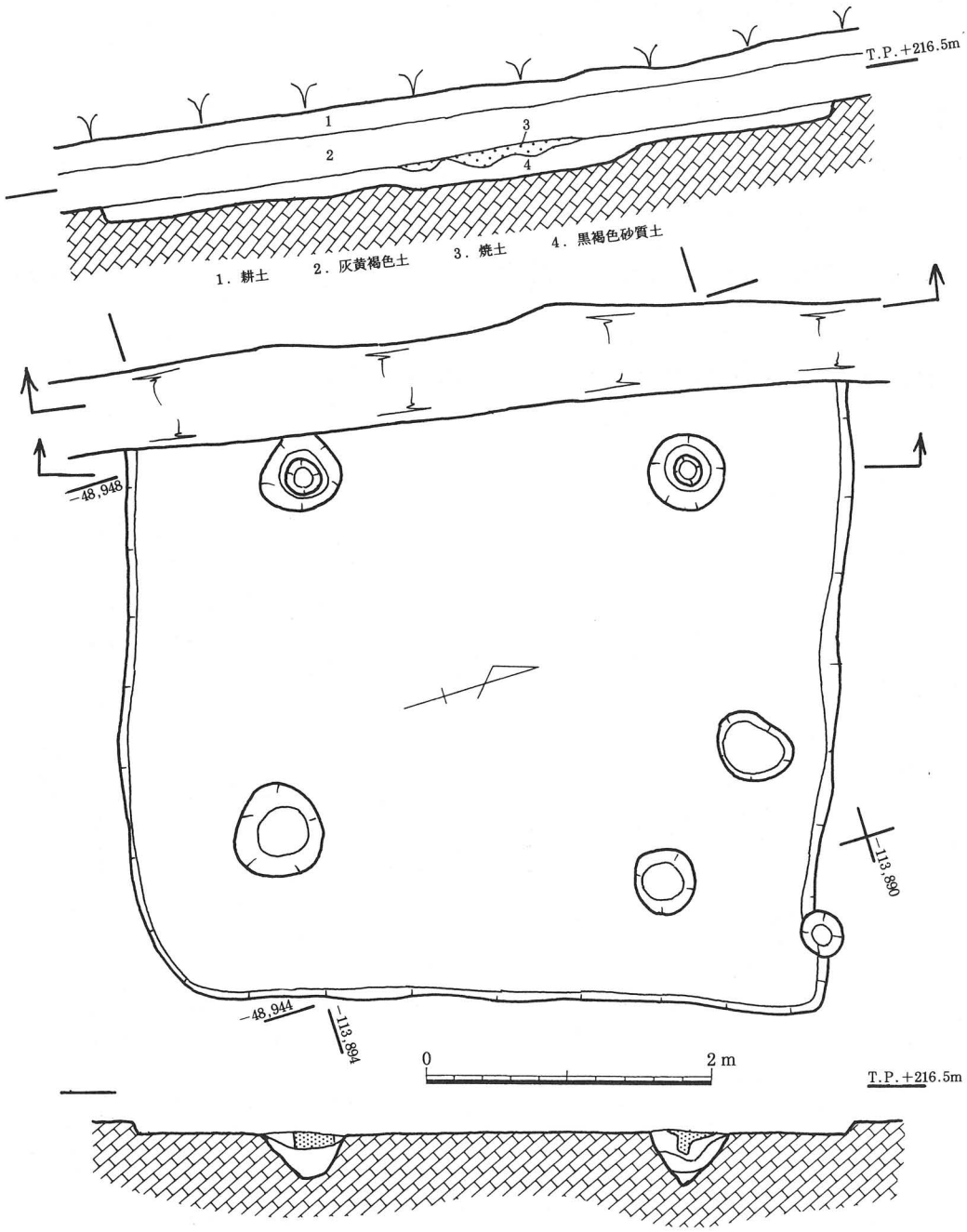


第７図　竪穴住居２実測図

竪穴住居３

竪穴住居２の北２ｍ離れて所在する。一辺5.0ｍの方形で、柱穴は４つ検出した。柱穴の掘り方は径0.5～0.6ｍ、深さ0.3～0.4ｍで、断面に径0.25ｍの柱根の痕跡が観察された。またいわゆる壁溝はなかった。

西側のセクションに焼土層の堆積が認められた。位置は住居の西辺中央にあり、竈の一部と判断できる。床面を幅1.7ｍ、深さ0.1ｍ掘削した落ち込みの上に黒褐色土を入れて、その上に竈を構築したものと考えられる。このように竪穴住居において竈直下の床面に落ち込みを有する例は、近隣においては1994・96年調査の野間遺跡（能勢町野間稲地所在）に同様のものがある。竈は焼土層を確認しただけで、その構造は明らかにできなかった。



第８図　竪穴住居３実測図

前述の竈直下の黒褐色土は竪穴住居の埋土と区別がつかない。この土層を住居全体の貼床と考えることはできるが、その場合は落ち込みと竈とは関係がないものとなる。

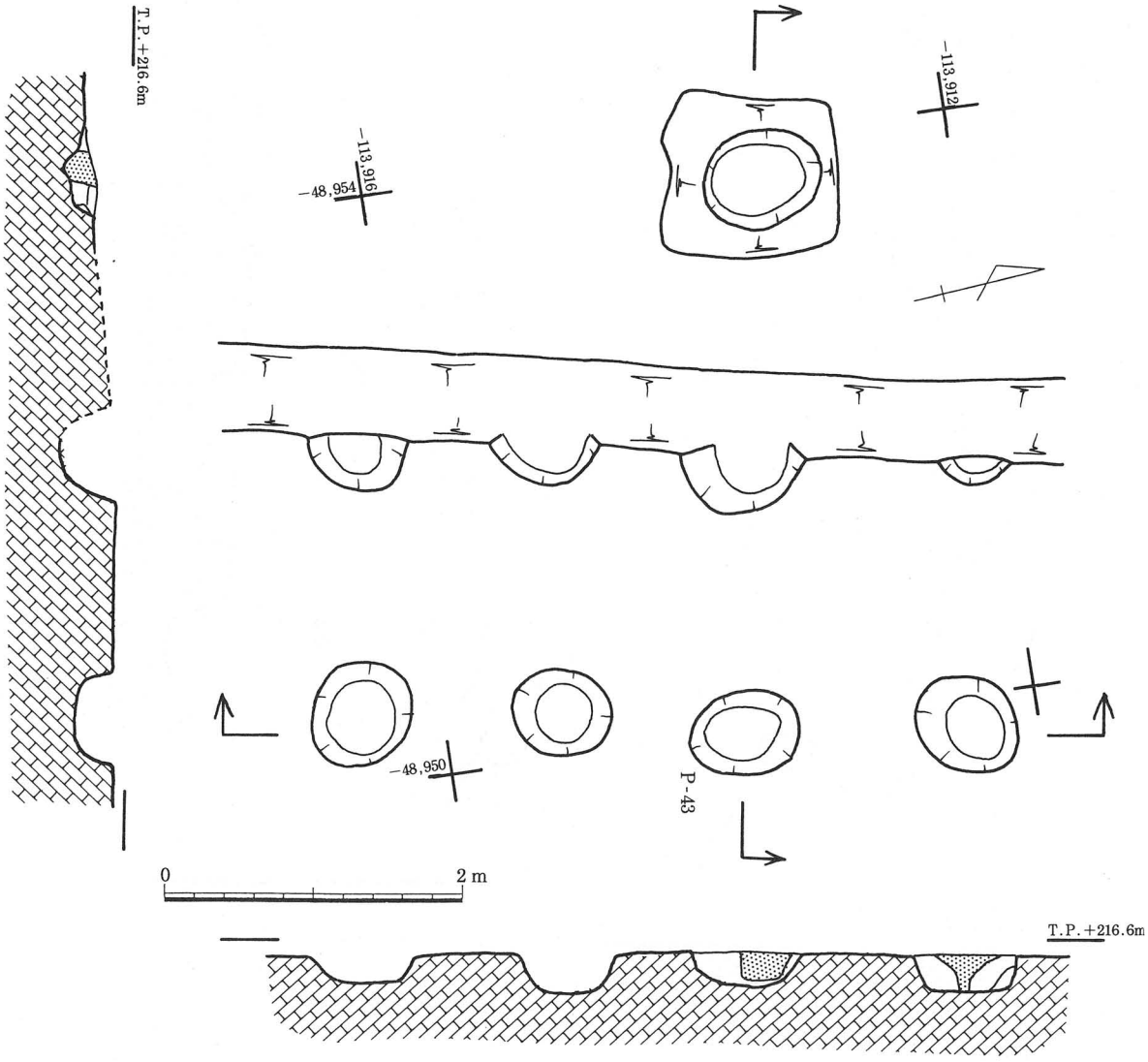
この住居からは土師器の細片が出土したが、図化し得るものはない。

掘立柱建物1

調査区南西部に所在する。東西2間（3.8m）、南北3間（4.2m）の総柱である。建物の西はさらにトレンチを開けてみたところ、柱穴は見当たらず、埋め戻した。従って東西2間は確実である。

柱間寸法は東西では1.9mの等間隔であるが、南北では北から1.6、1.3、1.3mである。柱穴の掘り方は径0.6～0.8m、深さ0.2～0.4mで、一部に柱根の痕跡を断面に観察した。建物の方向はN—10°—Eを測る。

出土遺物は非常に少なく、図化し得るものはP—43の柱穴の須恵器壺片（22）があっただけで



第9図　掘立柱建物1実測図

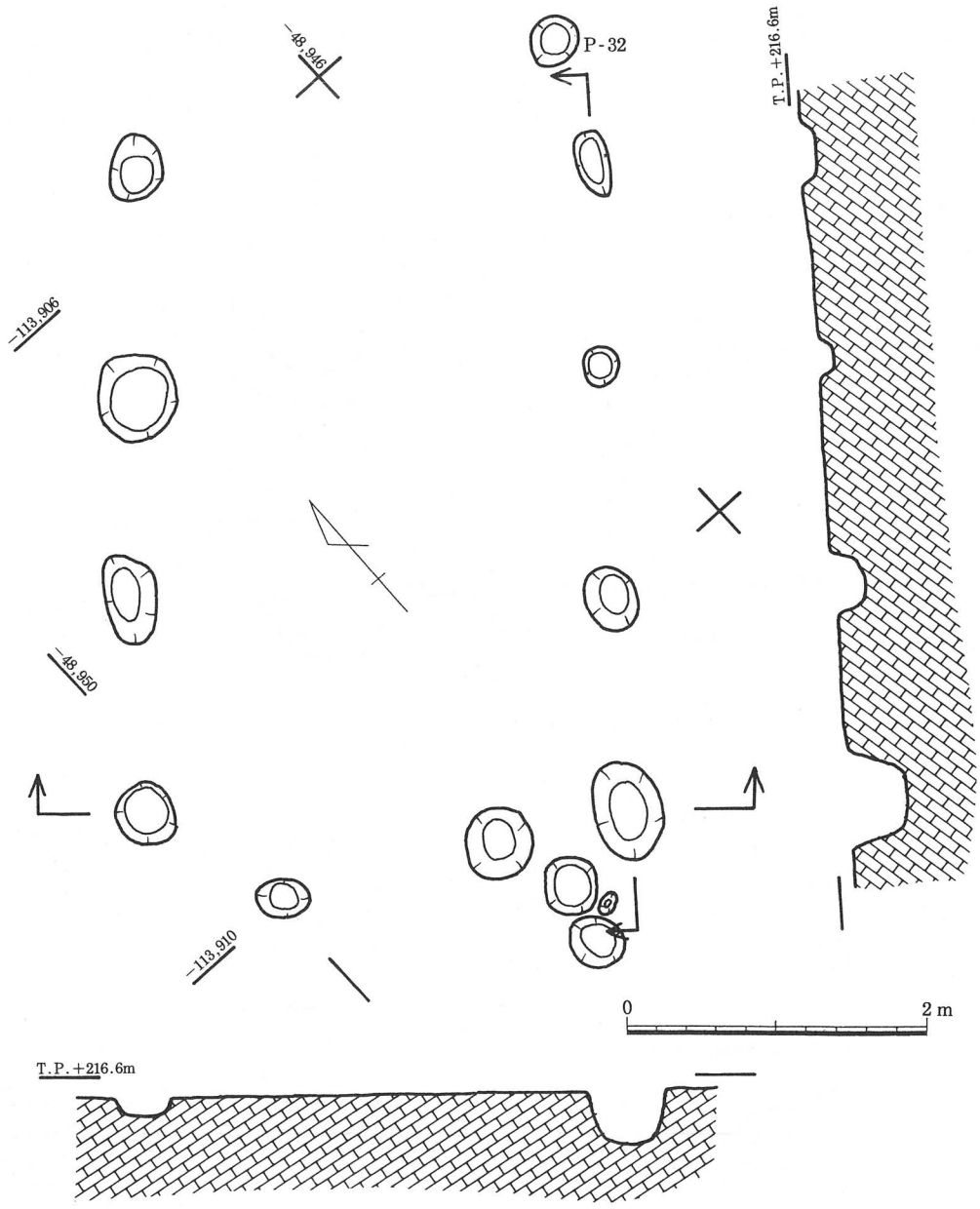
ある。遺物の時期は６世紀後半にまで遡ると思われるが、これが建物の時期であるものかどうか疑問である。出土遺物の量からして、竪穴住居と同じ７世紀前半と考えたい。

掘立柱建物２

掘立柱建物１の北東２ｍ離れて所在する。東西１間（３ｍ）、南北３間（4.4m）。柱間寸法は北から1.4、1.5、1.5m、また方向はN―35°―Eを測る。柱穴は径0.2～0.5m、深さ0.1～0.4m。

時期の分かるような遺物は出土しなかった。この建物は、南西に隣接する前述の建物１と方向が大きく異なり、また柱穴の大きさもかなり違う。建物１と２とでは時期の異なることが確実である。

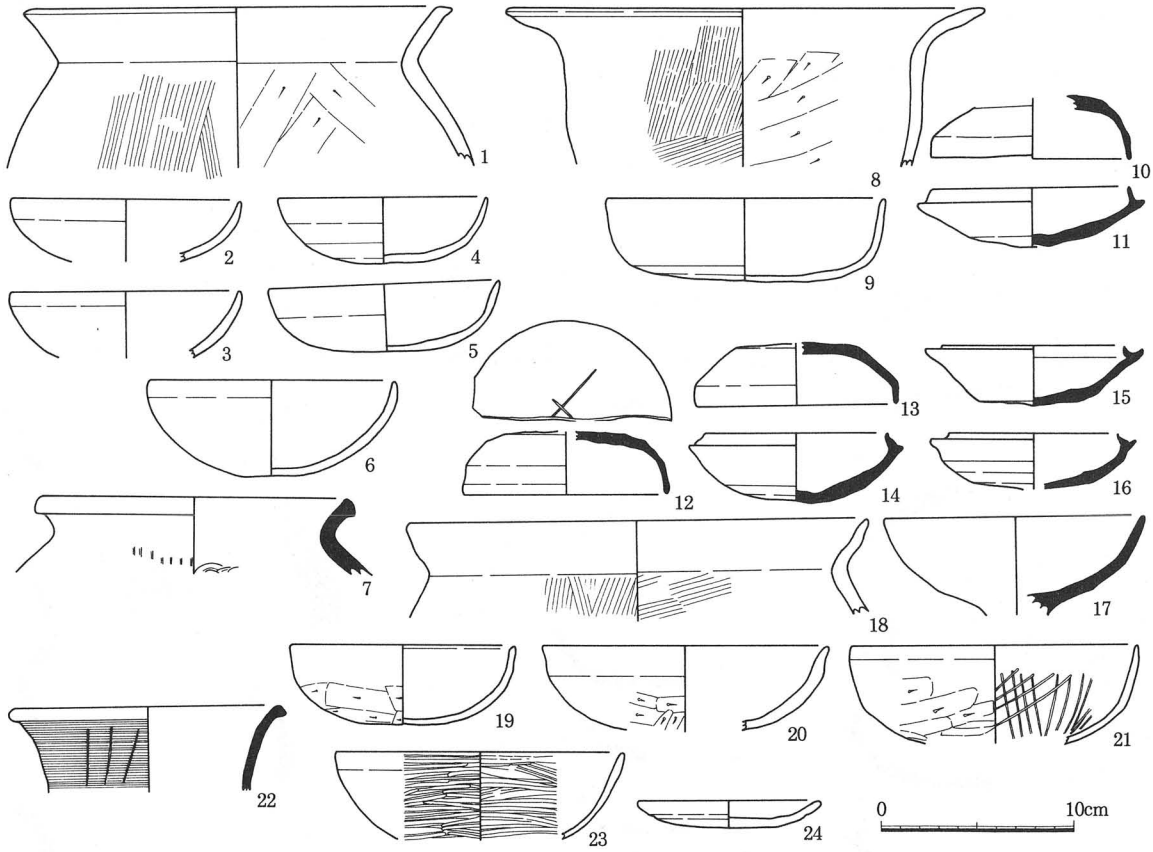
建物の北東隅から0.5m離れて所在するP―32からは、完形の土師器皿（24）が出土している。



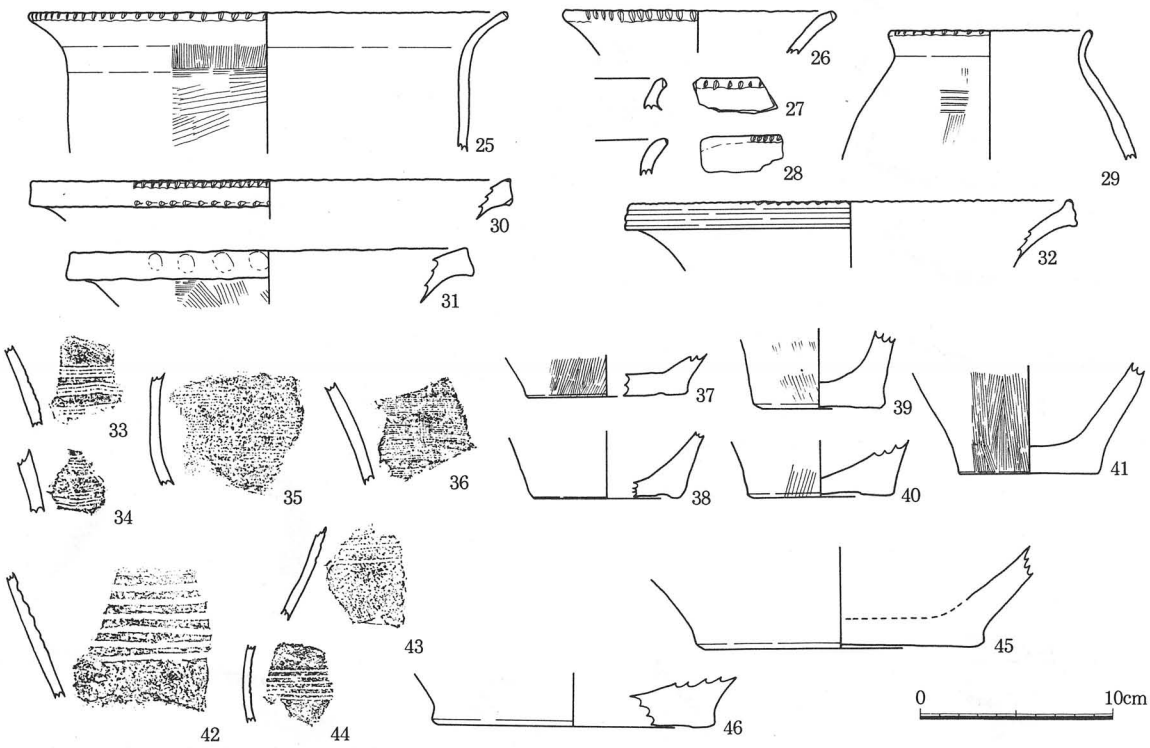
第10図　掘立柱建物２

建物と関係があるかも知れない。時期は12世紀頃であろう。

掘立柱建物１と２の中間で検出したＰ―39からは内外ともに密なミガキを施す瓦器碗（23）が出土した。時期は12世紀で、Ｐ―32と同じ頃と考えられる。



第11図　Ａ区各遺構出土遺物　竪穴住居１（１～７）、かまど（８～21）、Ｐ―43(22)、Ｐ―39(23)、Ｐ―32（24）



第12図　Ａ区出土の弥生式土器

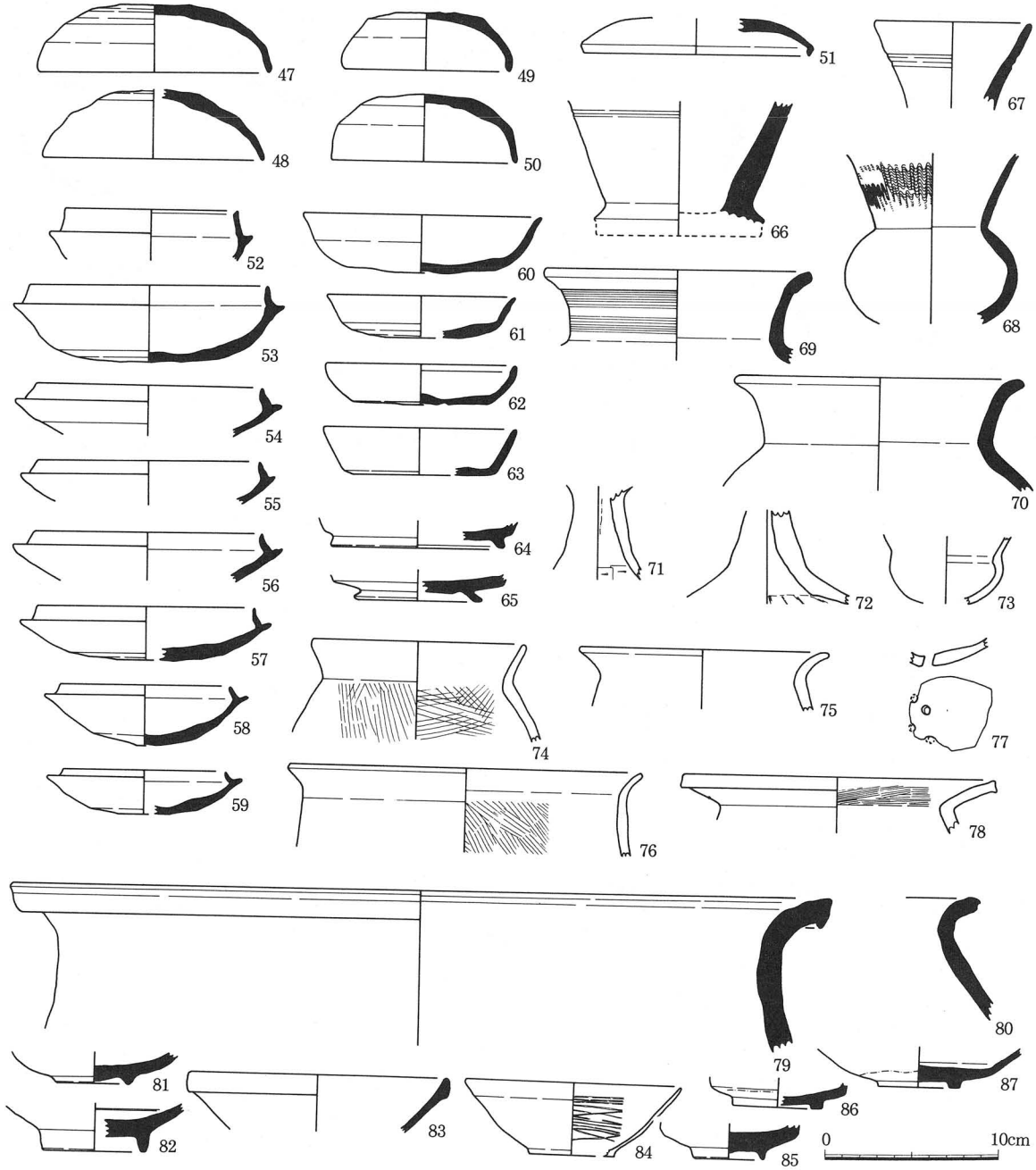
掘立柱建物３

竪穴住居３の東２ｍ離れて所在する。東西２間（3.1m）、南北２間（3.2m）の総柱であるが、９本あるはずの柱穴のうち南東の２本は見当たらなかった。また全体に不整形を呈し、柱間寸法も1.5～1.8mと不揃いである。柱穴は形0.3m前後、深さ0.1～0.2m。遺物の出土がなく、時期は不明と言わざるを得ない。

他にも小ピット多数検出したが、建物としては組み合わない。

弥生式土器

本区の包含層中からは、弥生式土器が量的にかなりまとまって出土している。今回はこの時代の遺構は見つからなかったが、周辺にあることは確実であろう。（25～29）は甕で、その口縁端



第13図　Ａ区包含層出土遺物　古墳時代後期～飛鳥時代（47～78）、中世（79～87）

部に刻目。このうち（25）の外面には粗いハケ目を施し、また口縁部外面に煤が付着して煮炊きに使用された痕跡を示す。（29）の体部外面の一部にタタキ目。（30～32）は壺の口縁部。（30）は端部の上下に刻目、（31）は端面に指頭圧痕が等間隔に並ぶ。（32）は端面に凹線と刻目が施される。（33～36）は櫛描文の破片。（37～41）は底部でハケ目。（41）の底の外面にはミガキの痕跡がある。以上は中期のものである。

（42～44）はヘラ描き沈線文の破片。（45、46）は底部である。磨滅して分かりにくいが（45）の外面にミガキを施す。以上は前期である。

包含層出土の遺物

A区の包含層からは前述の弥生式土器だけでなく、古墳時代後期から中世にかけての遺物が出土している。須恵器の坏蓋（47～51）、立ち上がりを持つ坏（52～59）、高台のない坏（60～63）、高台を持つ坏（64、65）。（66）はこね鉢、（67～70）は壺。以上は須恵器である。

土師器としては高坏（71、72）、小型壺（73）、甕（74～76）、甑の底部（77）、壺（78）。時期は6世紀後半が（47、52、68～70）、8世紀に入るものが（51、78）で、他は7世紀のものと考えられよう。

中世では、丹波焼の甕（79、80）、中国製の青磁（81）、白磁（82、83）、瓦器碗（84）。（85～87）は唐津焼で、近世に近くなる。以上の中世の遺物は、包含層でもかなり上層か、近年の田畑に伴う盛土層からの出土である。

第3節　B区の調査

調査区

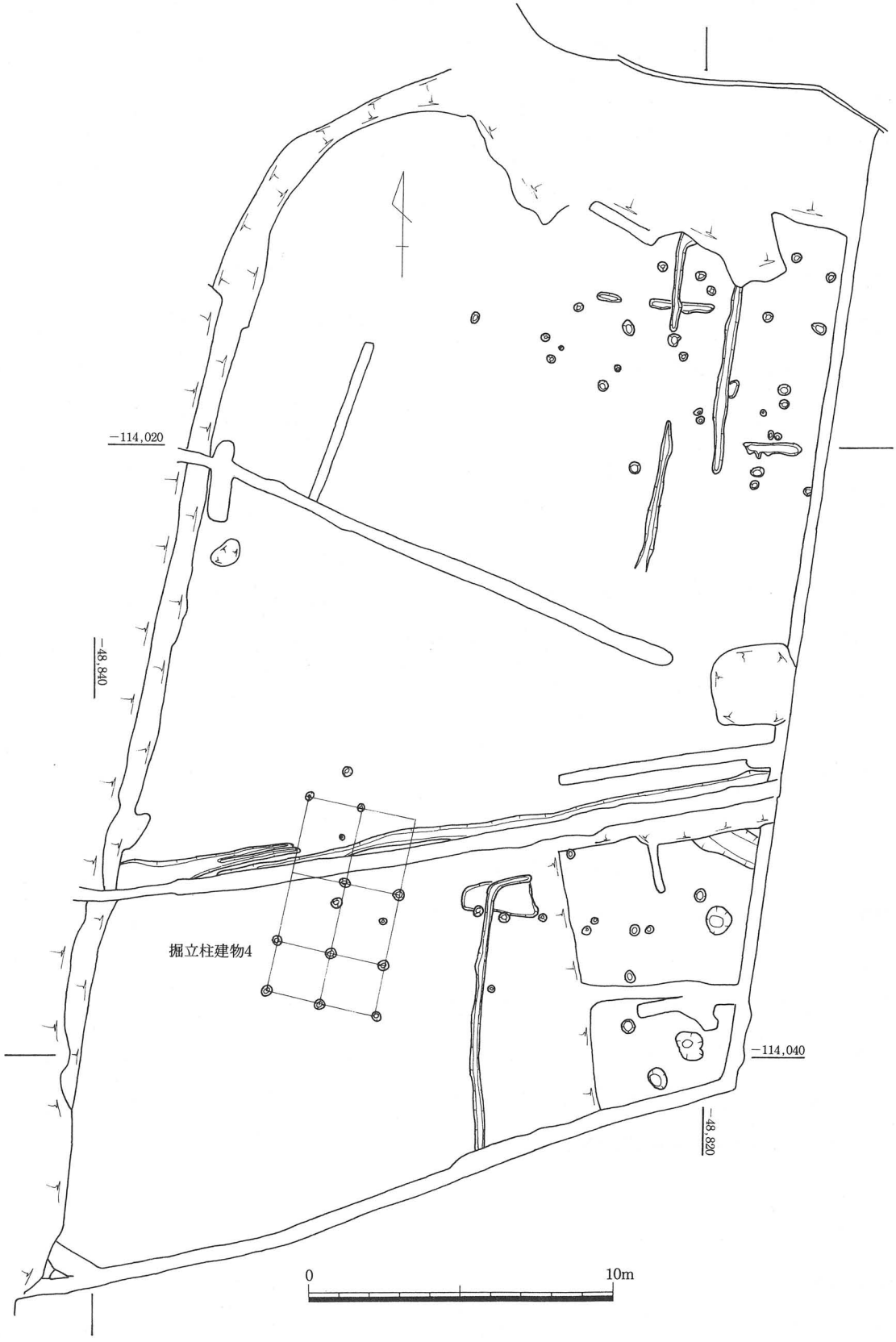
当区は東西20m、南北35m程の調査で、広い一筆の水田の一部である。北端部は現用水路建設時に掘削され、また中央部では東から西方向への暗渠排水溝が掘削されて、いわゆる攪乱となっている。

表土下の遺物包含層は0.05～0.2m程の厚さで、これを除去すると地山となる。地山面は黄褐色度と黒色土とが斑模様に分布するもので、これは能勢地方ではよくあることである。黒色土の地山面に遺構がある場合、調査当初は戸惑うが、しばらくすると見分けることが可能となる。なおこの黒色土は礫を含まず粘質が強いもので、もう一つの地山である黄褐色土とは性質の違うものである。

掘立柱建物4

調査区の南西部に所在する。東西2間（3.8m）、南北3間（6.6m）で、柱間寸法は東西は1.9mの等間隔、南北では北から2.5、2.4、1.7mとなる。方向はN—17°—Eを測る。

柱穴は径0.25～0.4m、深さ0.1～0.2m。出土遺物はほとんどなく時期は分からないが、後述



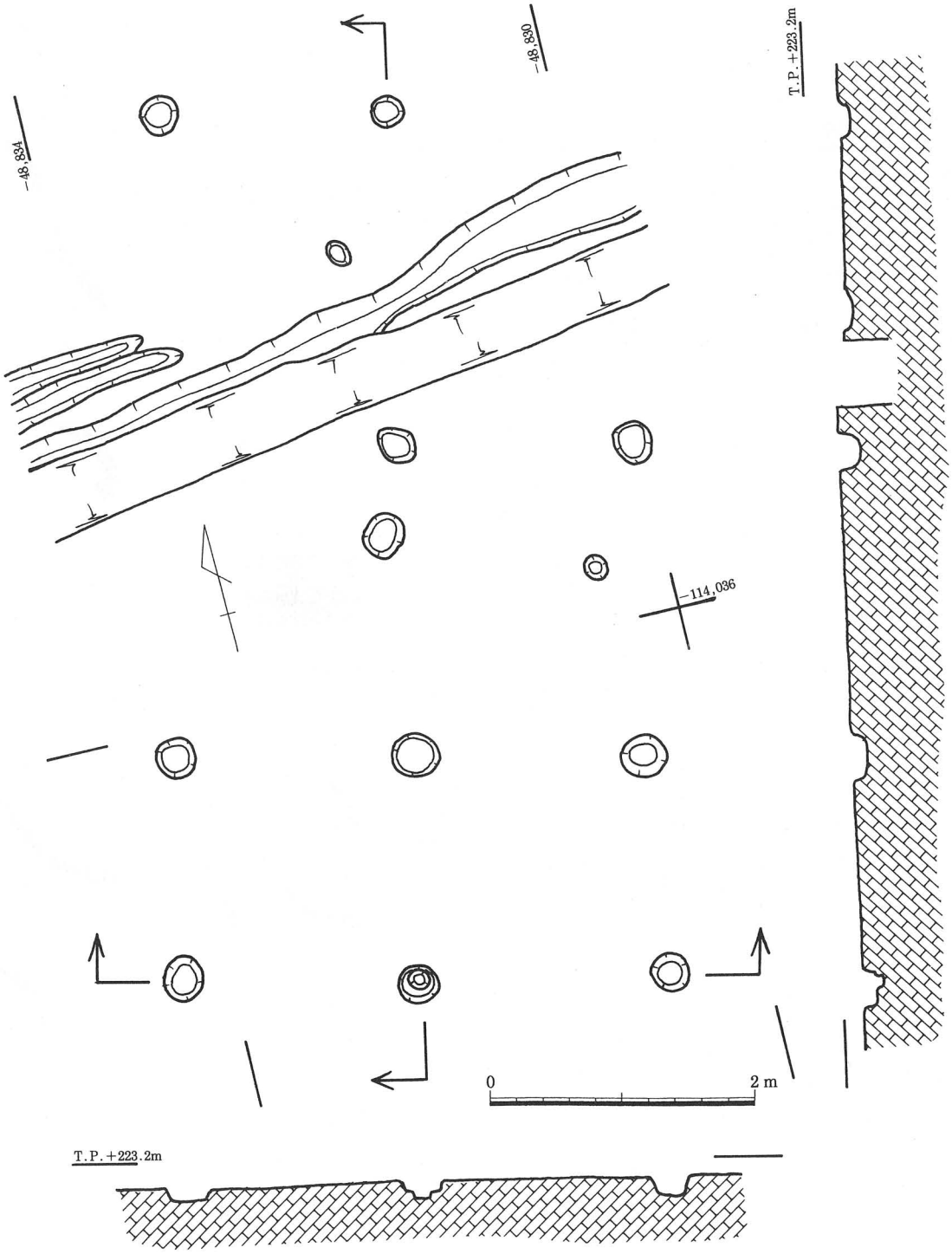
第14図　B区遺構全体図

の包含層出土遺物から13世紀後半～14世紀前半頃と推測する。

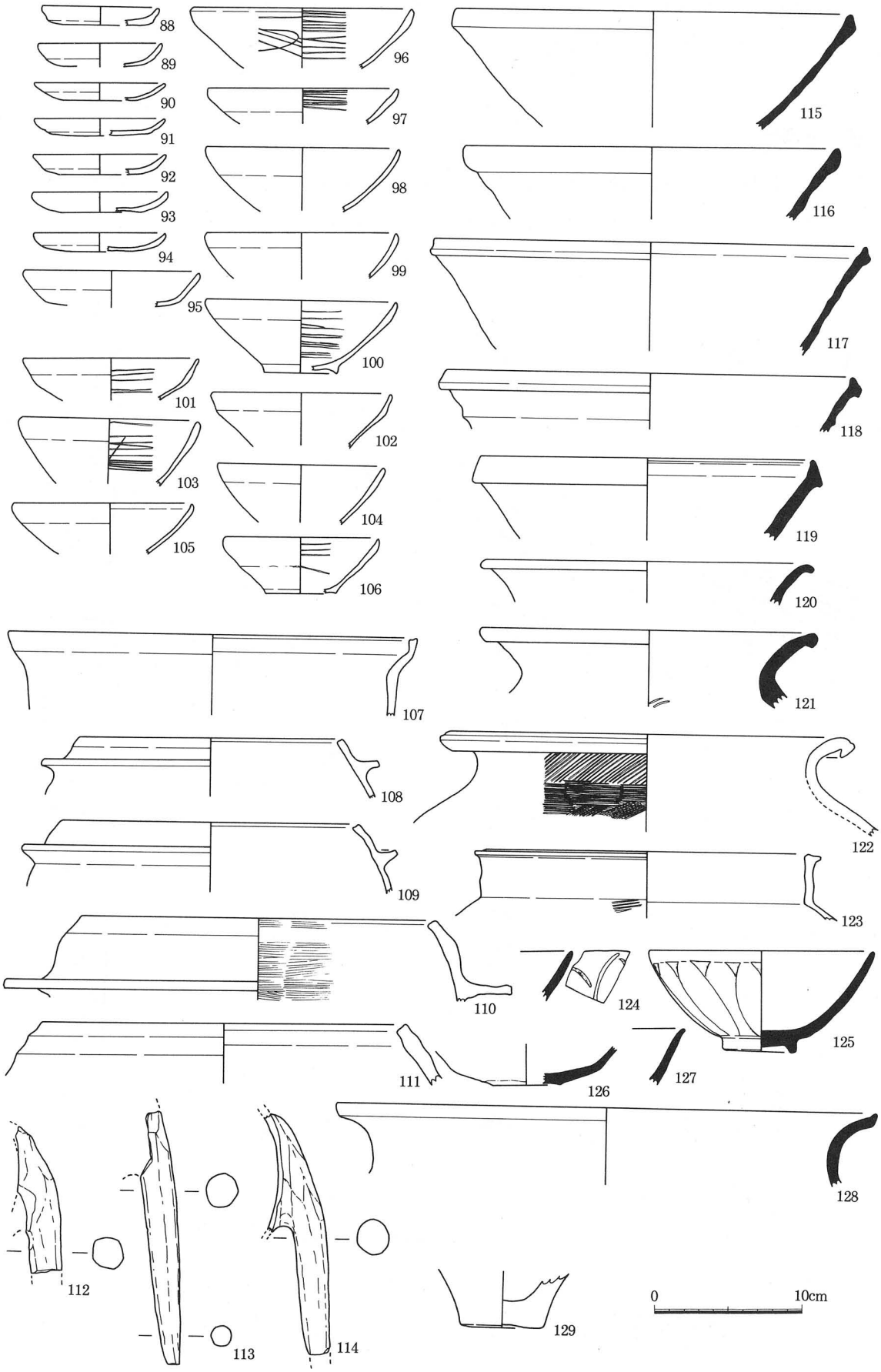
当区では小ピット群や溝が多く検出されたが、他に建物として組み合うものはない。結局、建物４は孤立して建っていたような印象を受ける。

包含層出土遺物

包含層からは中世の遺物が多く出土した。土師器小皿（88～94）、皿（95）。瓦器碗（96～106）は丹波型といわれるもので、時期は一部に12世紀になるものがあるが、おおむね13世紀から14世



第15図　掘立柱建物４実測図


88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
0
10cm

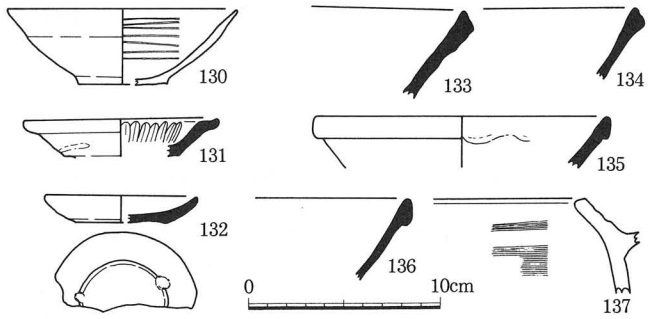
第16図　B区出土遺物

紀前半のものである。（107）は瓦質の鍋、（108～111）は瓦質羽釜の口縁部、（112～114）は瓦質の三足の脚部。須恵器では東播系のこね鉢（115～119）、壺（120、121）が出土している。（122）の壺は須恵質だが、焼成がわるく、内側の表面がかなり剝落している。（123）は土師質のタタキ鍋。青磁（124～127）。（128）は焼成の悪い須恵質の壺であるが、あまり例を見ない。（129）はこれまでとは時期が全く異なる弥生式土器の底部で混入遺物である。

第４節　Ｃ・Ｄ区の調査

Ｃ区はＢ区より70m東に、Ｄ区はＣ区より10m東に設定した調査区である。調査の結果、近代以降の暗渠排水溝や擁壁の石組みの下部を検出したのみで、それ以前の遺構はなかった。地山面において浅い谷状に落ち込む自然地形を検出したが、それは遺構と言うことはできない。

地山面を覆う層から中世の遺物が若干得られた。Ｃ区からは瓦器碗（130）、瀬戸の菊皿（131）、青磁皿（132）。Ｄ区からは東播系のこね鉢（133、134）、白磁碗（135、136）、土師器羽釜（137）がある。



第17図　Ｃ・Ｄ区出土遺物　Ｃ区（130～132）、Ｄ区（133～137）

第3章　まとめ

以上の調査の成果を簡単にまとめると、

旧石器時代・縄文時代

この時代のものは遺構・遺物ともになかった。倉垣地区およびその周辺でのこれまでの調査においても、この時代のものはない。当地区にはこの時代の遺跡はないとしてもよいだろう。

弥生時代

前期から中期までの弥生式土器が多く出土したが、遺構はなかった。周辺に遺構があることは確実である。今後の調査に期待される。

古墳時代

前・中期のものは全くなかったが、後期については若干の遺物の出土があった。末期あるいは飛鳥時代のものとして、作り付けの竈を持つ竪穴住居や掘立柱建物を検出し、また遺物も多く出土した。竈は支脚が立ったまま検出されており、遺存状況の極めて良好なものである。

奈良・平安時代

この時代の顕著な遺構・遺物はなかった。しかし周辺の調査では見つかっており、今後の調査によって当時のことが少しずつ明らかになっていくだろう。

中世

A区では12世紀頃と考えられる掘立柱建物と小ピット、B区では13～14世紀頃の掘立柱建物を検出した。遺物の出土も多かった。中世の倉垣地区は「倉垣荘」という荘園であった。この荘園と関係があるかも知れない。今後の調査でも、この荘園との関係が注目されよう。

報　告　書　抄　録

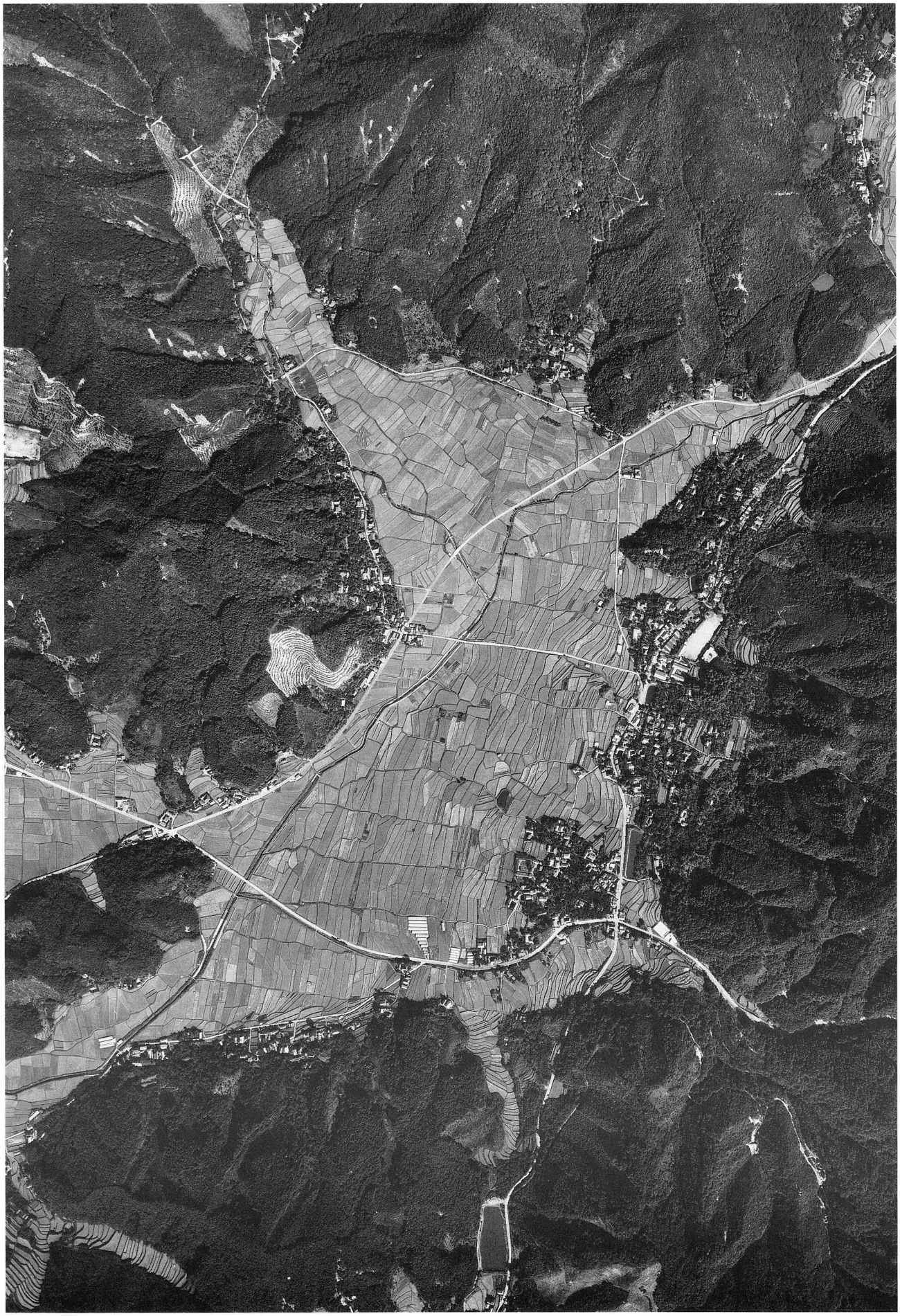
ふりがな	くらがきいせき　はっくつちょうさ　がいよう
書名	倉垣遺跡発掘調査概要
副書名	農村基盤整備事業「歌垣第２地区」に伴う調査・III
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	辻本　武
編集機関	大阪府教育委員会文化財保護課
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　℡06－941－0351（代表）
発行年月日	1998年５月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
倉垣遺跡（くらがきいせき）	大阪府豊能郡（おおさかふとよのぐん） 能勢町倉垣（のせちょうくらがき） 地内（ちない）	27322		34° 58′ 19″	135° 27′ 50″	1997年８月 ～1998年３月	2,100m²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
倉垣遺跡	集落跡	弥生時代		前期と中期の弥生式土器	
		飛鳥時代	竈、竈付きの竪穴住居 掘立柱建物	須恵器、土師器	
		中世	掘立柱建物	瓦器、土師器、青磁等	

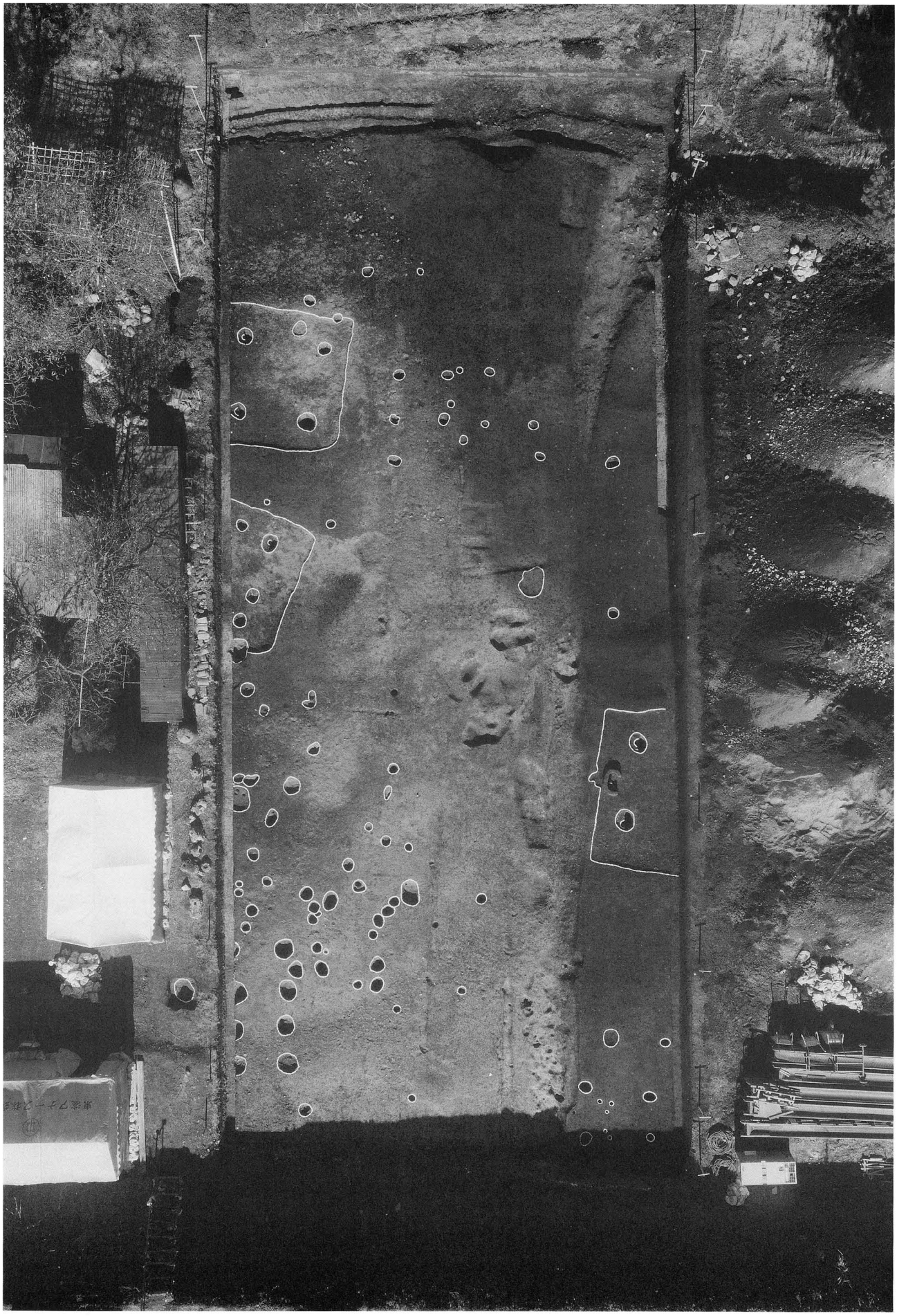
図　　版

倉垣地区（北から）



図版一　倉垣地区空中写真

図版二　A区空中写真



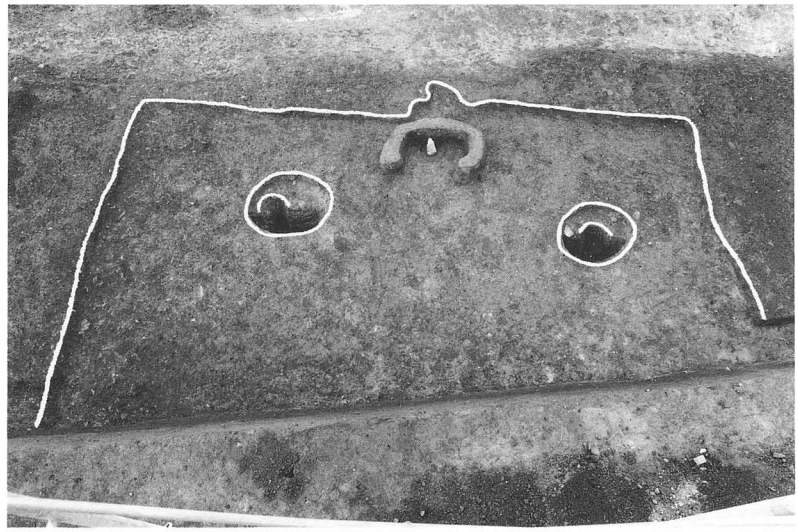
図版三　A区全景・竪穴住居2・3

A区全景（北から）

竪穴住居2（東から）

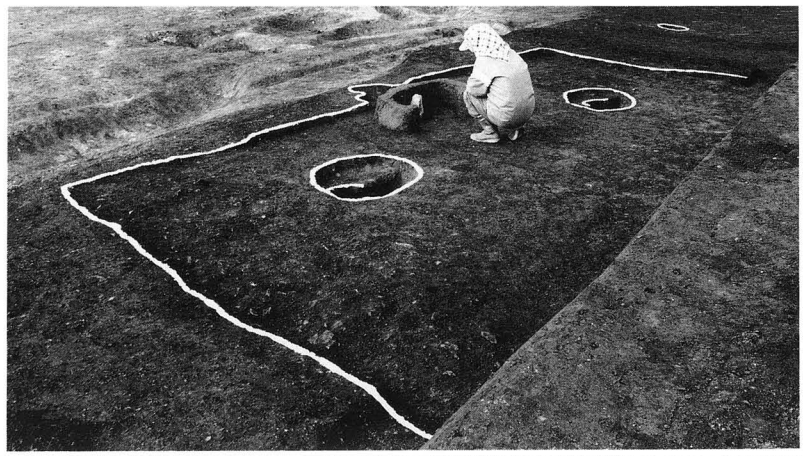
竪穴住居3（東から）

図版四　竪穴住居1

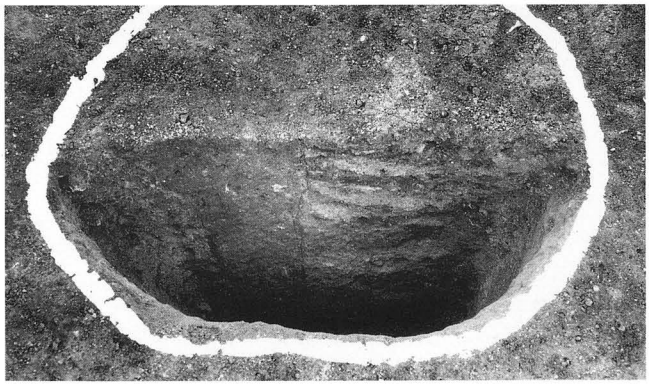


全景（西から）

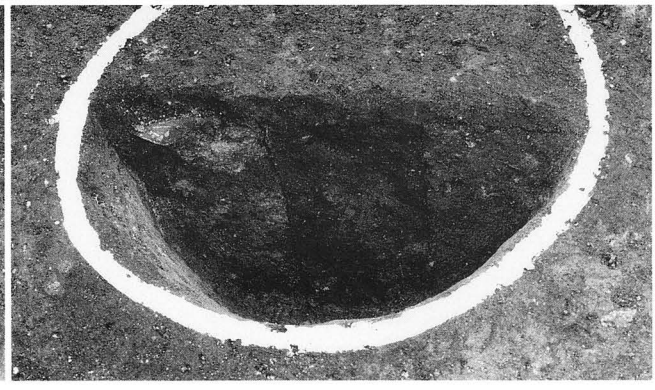
住居内の竈（西から）



（南西から）

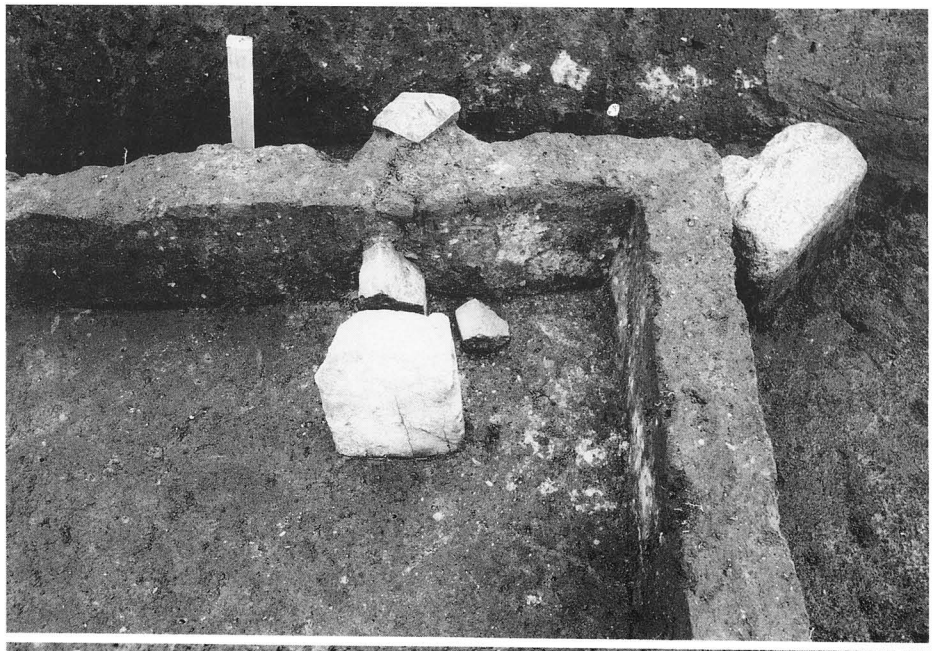


P－9断面



P－10断面

図版五　竈状遺構



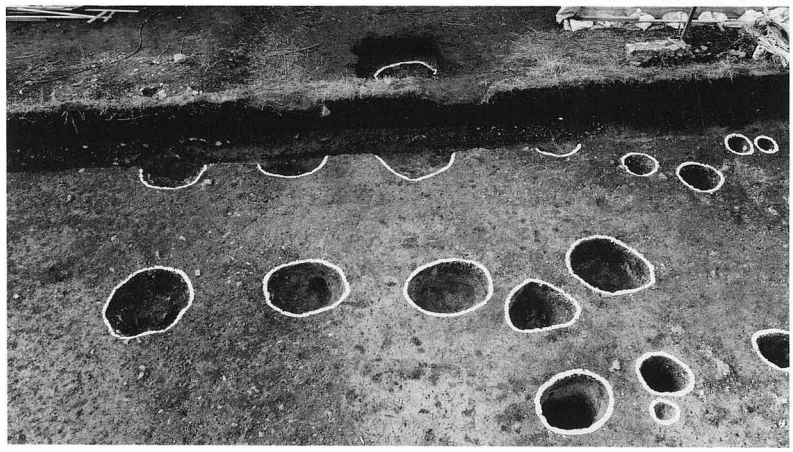
検出当初（西から）

断面（西から）

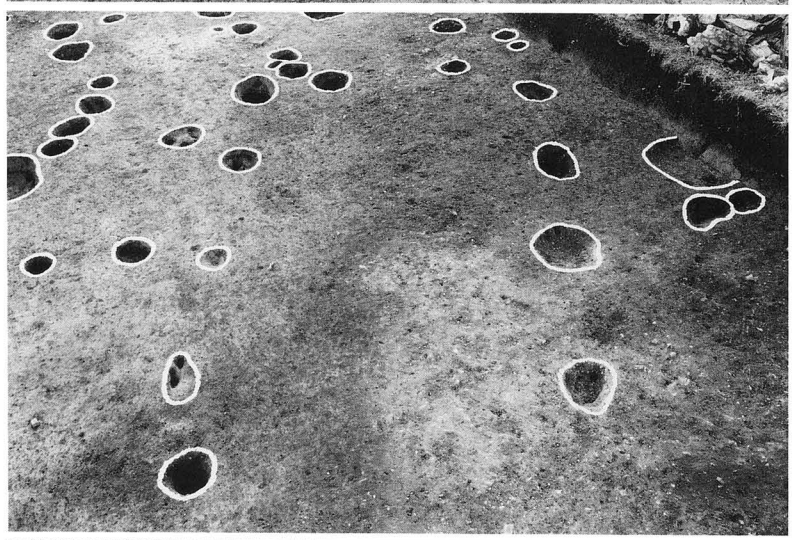
断面（北から）

図版六　掘立柱建物1・2他

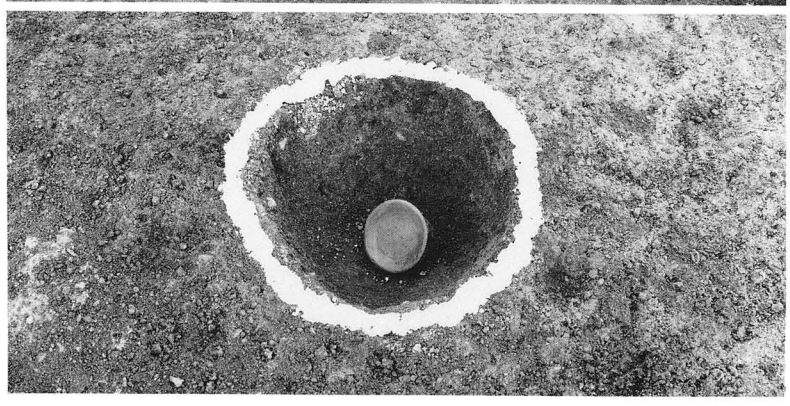
掘立柱建物1（南から）



同上（東から）



掘立柱建物2（北東から）



P－32（東から）

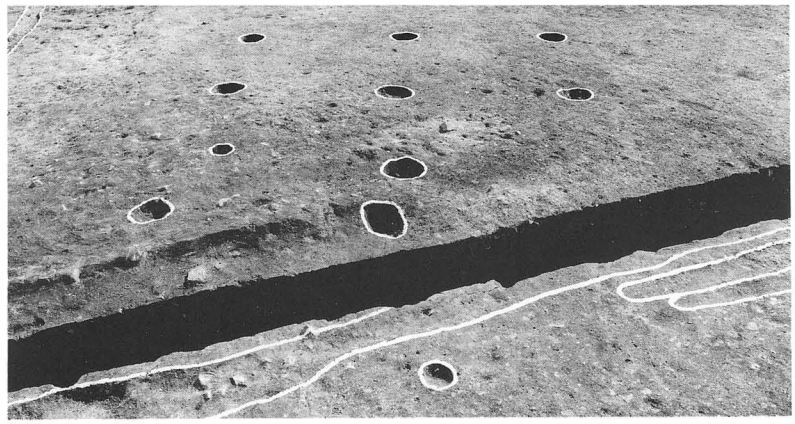
図版七　B区空中写真

図版八　B・C・D区全景

B区全景（南から）

C・D区空中写真

図版九　掘立柱建物4・D区・C区



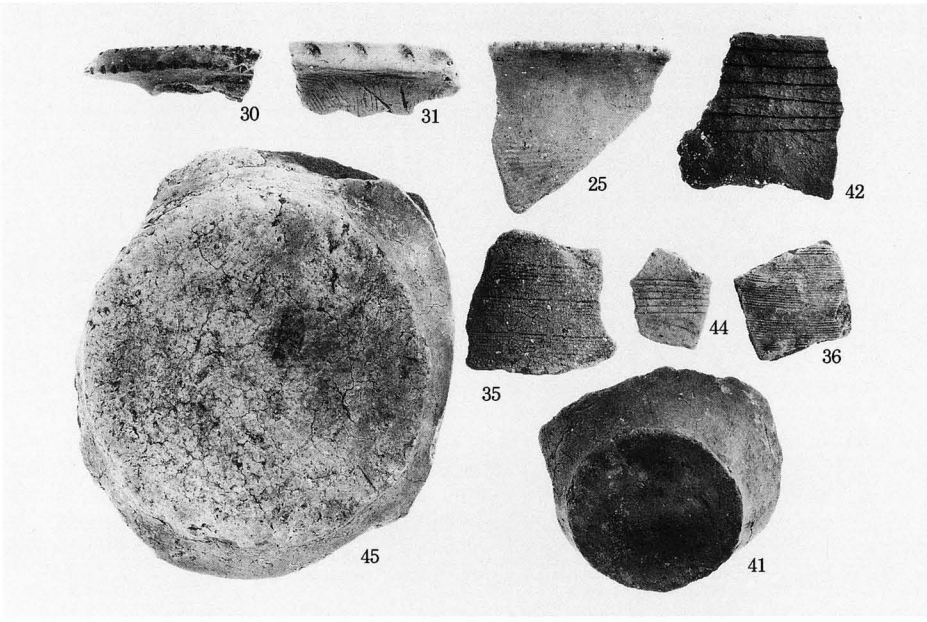
掘立柱建物4（北から）

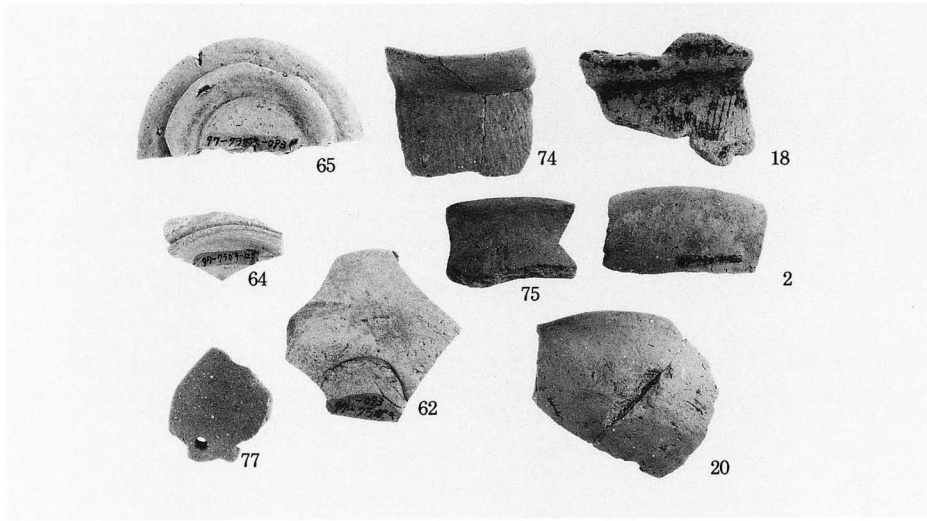
D区（西から）

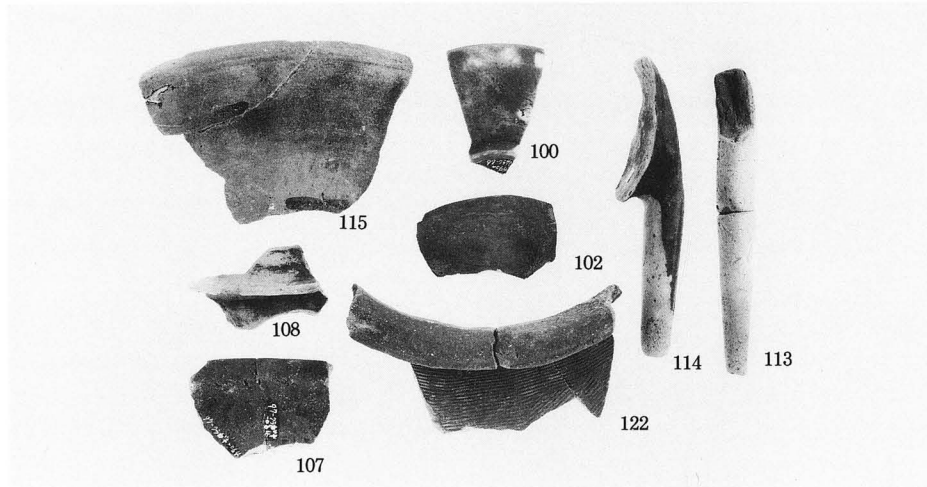
C区西半（南から）

C区東半（南から）

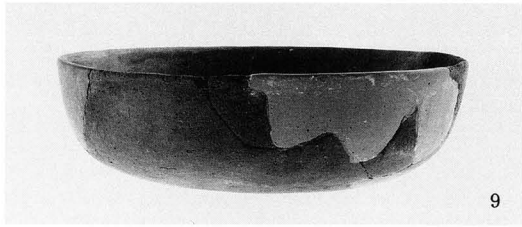
図版十　倉垣遺跡出土遺物(1)

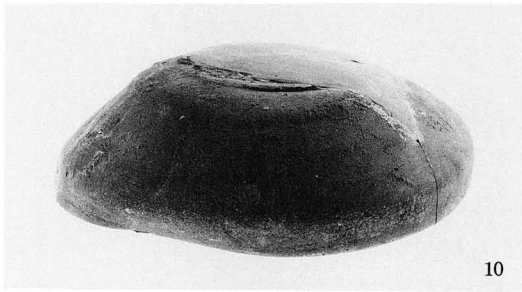






図版十一　倉垣遺跡出土遺物(2)

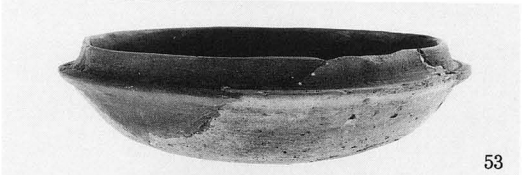

9

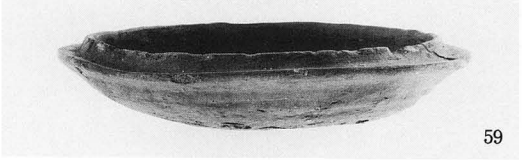

10

11

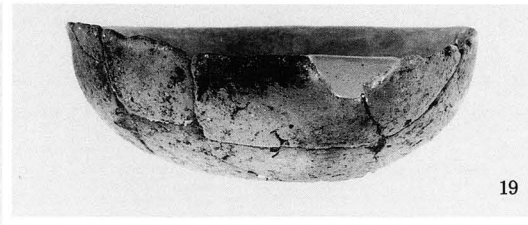
15

49


53


59

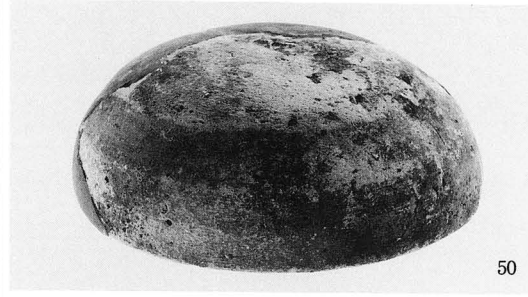
125


19

12

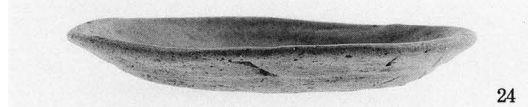
14

47


50

58

60


24